

原著論文

長期実務実習のサポートチームによる指導の有用性

— 実習指導に対するアンケート調査より —

小林 文¹⁾, 向後麻里¹⁾, 齋藤 勲^{1) 2)}, 村山純一郎^{1) 2)},
山元俊憲¹⁾, 加藤裕久¹⁾, 木内祐二¹⁾

¹⁾ 昭和大学薬学部

²⁾ 昭和大学病院薬剤部

要 旨

- 【背景】昭和大学薬学部では、平成19年度から病院実務実習の指導体制や内容を模索し、指導薬剤師、担当教員、実務家教員との指導体制(実務実習サポートチーム)と指導方法や内容を探ってきた。サポートチームによる実習指導の有用性を知るために平成22年度の実務実習終了後アンケート調査を行った。
- 【方法】実習期間は12週間とした。8週間を病棟実習とし、4週間毎異なる診療科で、実習生は原則1名の患者を担当した。平成22年度の実習指導について、実習生(5年生)166名、薬剤師112名、大学の教員(担当教員)65名にアンケート調査をした。また、昭和大学版実習支援システムの使用状況についても調査の対象とした。
- 【結果】回収率は、実習生90%、薬剤師91%、担当教員94%だった。病棟実習指導に対する実習生の満足度は94%だった。実習生、担当教員、病棟指導薬剤師の3者が病院内で行うミーティングは、61%の実習生が役に立ったと回答した。また、76%の病棟指導薬剤師、78%の担当教員もミーティングが実習生指導や評価に役立ったと回答した。しかし、54%の実習生は実習支援システムを1回も使用しなかった。
- 【考察】実習生の指導に対する満足度が高く、指導薬剤師や担当教員も9割以上が実習生をサポートできたとしたことから、サポートチームの実習指導は有用だったと考える。しかし、指導に必要な実習支援システムを約半数が使用しなかったため、今後、改善する必要がある。

Key Words : 病院実務実習, 実習指導, 薬学教育, アンケート調査

緒 言

平成18年度に薬学部6年制教育がスタートし、平成22年度は5年生が初めて長期実務実習を実施した。4年制薬学教育での見学型実習中心の4週間実習と異なり、6年制の長期実務実習は、参加型

実習中心の11週間実習である^{注1, 注2}これは、医療人として実践的能力をもつ薬剤師を養成するための重要な教育カリキュラムと位置付けられている。

注1 「薬学教育6年制と長期実務実習について」
社団法人日本薬剤師会 <http://www.yama-yaku.or.jp/reference/training/file/6year/1.pdf> # search=
'日本薬学会 実務実習 参加型 見学型'

注2 「薬剤師養成のための薬学教育実務実習の実施方法について」
厚生労働省医薬食品局 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/iyakuhin/yakuzaishi/dl/yakuzaishi-c.pdf> # search=
'日本薬学会 実務実習 参加型 見学型'

長期実務実習は、平成14年に文部科学省により提示された「実務実習モデル・コアカリキュラム」に準拠して行われ、さらに長期実務実習の実施に向け、薬学教育協議会、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会などから実習指導内容、指導体制、指導薬剤師養成などが検討され提示されてきた^{注3, 4, 5, 6, 7, 8}。実習の指導をする薬剤師と大学の教員は、実務実習モデル・コアカリキュラムに示すSBOsを一定到達度へ導くとともに、個々の実習生の興味や将来の希望を把握し、個人に合わせた指導が必要になる。さらに、実習生が実習期間中に抱える不安や課題を薬剤師、大学教員、実務家教員がいち早く吸い上げ、実習先病院と大学間で情報を共有し、解決していく体制(サポート体制)も実務実習には必要である。第13回薬学教育改革大学人会議アドバンストワークショップにおいて、病院と大学間での薬剤師と大学教員による指導連携は有用であるが、まだ十分な連携ができていないと問題になった^{注9}。

昭和大学薬学部では、4年制薬学部4学年を対象に実施した4週間の病院実習を平成19年度から「6年制薬学実習生の長期実務実習トライアル」と位置づけ、実習の指導体制や内容などを模索、改善

してきた^{1, 2)}。トライアルを実施した結果、6年制の長期実務実習に向けた実習の指導体制を強化する必要性が見出された。本学の教員と病院に勤務する薬剤師を交えて指導者講習会を実施したところ、実習を指導する薬剤師(以下、指導薬剤師)、本学の教員(以下、担当教員)、実務家教員の3者で長期実務実習をサポートできる体制作りが求められた。その結果を受けて、本学薬学部では、実習期間中に実習生を様々な面からサポートする体制として、実務実習サポートチーム(以下、サポートチーム)を構成した^{1, 2)}。このサポートチームによる体制は、実習目標である「患者に始まり、患者に終わる」を完遂するため、指導薬剤師、担当教員および実務家教員がそれぞれの立場から実習を支援する体制とした。この理由は、個々の実習生の実習目標の達成状況を把握し、相互の連携をより図れた実習生の指導が十分行えるよう配慮したためである。さらに本学では、病棟実習中には実習生が原則一人の患者を担当し(担当患者制)、責任を持って積極的に薬物治療に参画することができ体制を整えている。以前行ったアンケート調査からも9割以上の実習生が担当患者制の実習に、充実感や達成感を得たと回答している^{1, 2)}。

そこで今回、平成22年度に病院実習を行った実習生5年生を対象に病棟実習でのサポートチームによる指導についてアンケート調査をした。また、実習を指導した薬剤師および担当教員へは、それぞれの立場から実習生への指導およびミーティングについてアンケート調査した。

方 法

1. 実習内容

昭和大学薬学部は、参加型チーム医療実習を特長とし、全ての5年生が昭和大学の附属8病院で実習を行った。実習病院は、昭和大学病院、昭和大学病院附属東病院、昭和大学附属豊洲病院、昭和大学歯科病院、昭和大学藤が丘病院、昭和大学藤が丘リハビリテーション病院、昭和大学横浜市北部病院、昭和大学附属烏山病院であった(表1)。実習目標は、「患者に始まり、患者に終わる」である。実習期間は4週間を1クールと区切り、計3クー

注3 平成21年度 文部科学省医療人養成推進等委託事業「薬学教育実務実習の事前学習および指導体制の在り方に関する調査・研究報告」一般社団法人薬学教育協議会
http://yaku-kyou.org/About_council/issue/pdf/monka21_suda.pdf

注4 文部科学省医療人養成等推進事業「薬学6年制化による実務実習期間の延長に伴う指導体制の在り方に関する調査研究」一般社団法人薬学教育協議会
http://www.yaku-kyou.org/About_council/issue/ent/

注5 「6年制薬学教育課程における病院実務実習の指導体制について」日本病院薬剤師会
<http://www.jshp.or.jp/cont/080314.pdf>

注6 日本薬剤師会：薬局薬剤師のための薬実習生実務実習指導の手引き(2009年度版)、日本薬剤師会、東京、2009

注7 第十一回薬学教育改革大学人会議アドバンストワークショップ「これからの実務実習薬剤師養成 ワークショップのあり方について」公益社団法人日本薬学会
http://www.pharm.or.jp/kyoiku/pdf/adws_2203.pdf

注8 第九回薬学教育改革大学人会議アドバンストワークショップ「実務実習の学習効果を高めるために担当教員と薬剤師はどのように関わることができるか」公益社団法人日本薬学会
http://www.pharm.or.jp/kyoiku/adws_2012.pdf

注9 第十三回薬学教育改革大学人会議アドバンストワークショップ「第Ⅰ期実務実習の形成的評価」～初めての長期実務実習に対するフィードバック～
http://www.pharm.or.jp/kyoiku/pdf/adws_2210.pdf

表1 実習先病院の病床数と受入実習生数

附属病院	病床数	実習生数		
		I 期	II 期	III 期
昭和大学病院	815	24	24	12
昭和大学附属東病院	199	2	2	1
昭和大学附属豊洲病院	161	2	2	1
昭和大学歯科病院	22	1	1	1
昭和大学藤が丘病院	643	18	17	11
昭和大学藤が丘リハビリテーション病院	206	2	2	1
昭和大学横浜市北部病院	697	13	13	9
昭和大学附属烏山病院	381	3	3	1

※2施設の病院で実習を行う学生は、主に実習をする病院の人数に含めた

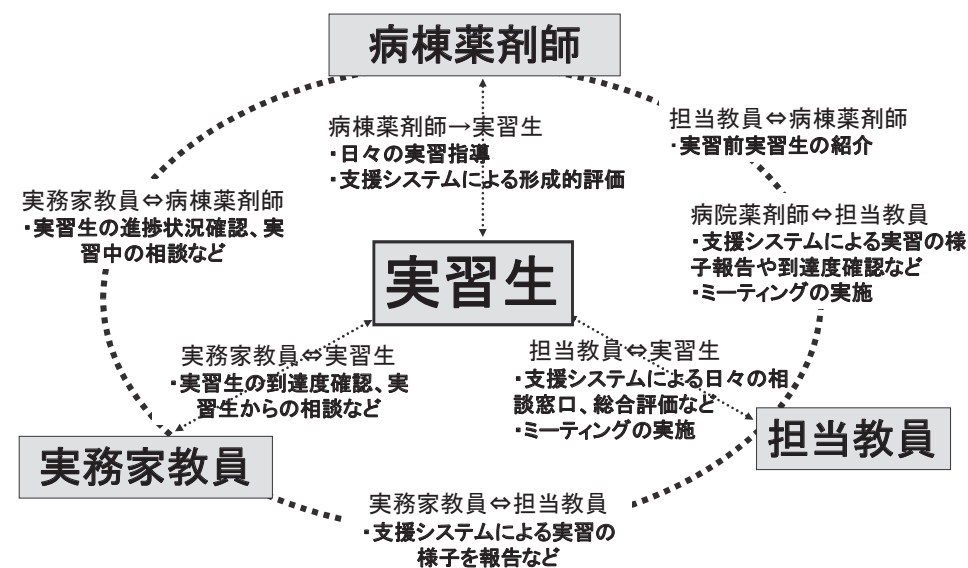


図1 病棟実習中のサポートチーム

ルの全12週間とした。3クールのうち、1クールは調剤や注射剤調剤、院内製剤をはじめとする病院の薬剤部または薬局内で行う実習（センター実習）、残りの2クールは病棟での実習とした。病棟実習では、実習生が原則一人の患者を担当する担当患者制を取り入れた。病棟で指導する薬剤師が患者に口頭で説明し、文書での同意が得られた場合に限り、実習生が患者の病状、副作用や検査値のモニタリング、各種検査への同行、手術見学、教授回診やカンファレンスへの参加、適切な薬物治療の提案などを行った。チーム医療の一員として患者の治療やケアに介入する内容とした。

2. 病棟実習中のサポートチームの構成と各指導者の役割

病棟実習中での実習生サポートは、指導者（病棟指導薬剤師・担当教員・実務家教員）が各方面から支える体制とした（図1）。

担当教員とは、本大学薬学部の各教室の教員であり、教室に配属された実習生に対し、実習のファシリテートやサポートを行う。

図1で示した担当教員は、実習開始前に実習生が作成した自己紹介シートとポートフォリオにより、実習生の得意分野や努力分野、実習に期待すること、実習目標を予め把握した。病棟実習中は、実習生と担当教員のミーティング（2者ミーティング）、実習生と病棟指導薬剤師、担当教員のミーティング（3者ミーティング）を行っ

た。2者ミーティングは、病棟実習開始2週目までに1回と4週目までに1回の計2回、大学にて行った。3者ミーティングは、病棟実習の中期(およそ3週目)に1回、実習病院にて行った。

ミーティングの内容は、病棟実習チェックシートに従って行った。このチェックシートは、実務実習モデル・コアカリキュラムの大項目8「薬剤業務管理指導業務」に準じて作成した³⁾。薬剤業務管理指導業務のSBOsは、学習者の行動の変化を伴う目標のことであり、3者ミーティングで使用するチェックシートは、SBOsの目標に到達できるレベルを想定した。なお、センター実習の間中はミーティングを実施しなかった。

実務家教員とは、昭和大学附属8病院のうち昭和大学附属病院、昭和大学藤が丘病院、昭和大学横浜市北部病院の各病院に大学から派遣された3名の教員である。実習期間内は常に病院に常駐し、大学には不在であった。実務家教員の役割は、実習生全員のファシリテートや実習上の問題点の解決をする相談窓口であり、実習の進捗状況のサポート、指導を行った。また、実習全体の運営や構築も行った。

病棟指導薬剤師とは、実習生の実習を指導する薬剤師の中で、病棟での実習を指導する薬剤師である。病棟指導薬剤師は、実習前に得られた実習生の情報をもとに、実習生が積極的に実習に取り組めるよう、実習初日に実習生の目標をポートフォリオで確認した。また、SBOsを達成するため、実習の指導と評価、そのフィードバックを行った。SBOsごとに形成的評価を行うとともに実習生自身の自己評価の結果についてもコメントし、実習生にフィードバックした。最終的に実習生が全てのSBOsに対し、形成的評価の評価基準である「3(できた)」～「4(十分できた)」^{1, 2)}を取得できるための指導を行った。病棟指導薬剤師と実習生の評価は、インターネットを用いた実務実習支援システムを用いることで担当教員と共有した。

サポートチームの運用は、実習開始前に担当教員と病院に勤務する全指導薬剤師が集まる実習説明会で、担当教員から病棟指導薬剤師へ実習生の得意分野、研究室での研究内容、将来の希望など

を紹介し、実習生の情報を共有することから始めた。

3. アンケート調査

実習終了後、アンケート調査を実施した。5年生の実習生(166名)に対するアンケートは、Ⅰ期～Ⅲ期のそれぞれの実習最終日に無記名で行った(表2)。アンケートの内容は、指導者から受けた病棟実習指導、3者ミーティング、実務実習支援システムの利用についての3項目とした(表3)。

全指導薬剤師(112名)および担当教員(65名)の指導者に対するアンケート調査は、実習の全日程が終了した時点に無記名で実施した。アンケートの内容は、指導者から見た実習指導、実務実習支援システムの利用についての2項目とした(表3)。

得られたデータは、有効回答数の割合%で表示した。

結 果

実習生からのアンケート回収数は149名であり、回収率は90%(Ⅰ期95%、Ⅱ期81%、Ⅲ期95%)であった。指導薬剤師からの回収数は102名、回収率は91%だった。担当教員の回収数は61名、回収率は94%であった。

1. 病棟実習指導について

図2は、病棟実習での指導に対する実習生の満足度調査の結果を示したものである。1回目の病棟(病棟1)の病棟指導薬剤師の指導の満足度(図2a)は、100%満足および75%満足と答えた実習生は、平均94%、2回目の病棟(病棟2)の病棟指導薬剤師の指導の満足度(図2b)は、平均92%であった。担当教員の指導に対する満足度(図2c)は、100%満足および75%満足と回答した実習生は、平均94%だった。その中でⅡ期は、75%満足とした比率が55%であり、Ⅰ期とⅢ期の比率に比べて多かった(Ⅰ期25%、Ⅱ期31%)。実務家教員の指導に対する満足度(図2d)は、100%満足および75%満足と回答した実習生は平均97%だった。

2. 3者ミーティングについて

図3は、実習生に3者ミーティングについてアン

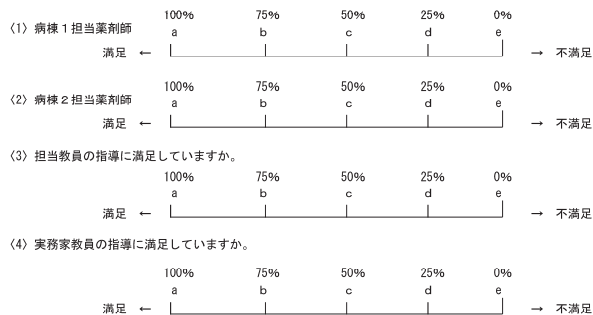
表2 病院における長期実務実習の流れ

	I 期	II 期	III 期
期間	5月10日～7月30日	8月30日～11月19日	11月29日～3月4日
	1クール:5月10日～6月4日 2クール:6月7日～7月2日 3クール:7月5日～7月30日	1クール:8月30日～9月24日 2クール:9月27日～10月22日 3クール:10月25日～11月19日	1クール:11月29日～12月24日 2クール:1月11日～2月4日 3クール:2月7日～3月4日
アンケート	実施日 7月30日 実施方法 マークシート 無記名 対象人数 65名	実施日 11月19日 実施方法 マークシート 無記名 対象人数 64名	実施日 3月4日 実施方法 マークシート 無記名 対象人数 37名

	1クール(4週間)	2クール(4週間)	3クール(4週間)
パターン1	病棟1	病棟2	センター実習
パターン2	病棟1	センター実習	病棟2
パターン3	センター実習	病棟1	病棟2

表3 実習生および指導者へのアンケート

A 実習生へのアンケート 指導についてお聞きします。



3者ミーティングについてお伺いします。

(5) 3者ミーティングの難易度は？

a. 難しかった b. まあ難しかった c. まあ簡単だった d. 簡単だった e. わからない

(6) 3者ミーティングはその後の実習に役立ちましたか？

a. とても b. まあまあ c. 変らなかった d. 全くない e. わからない

病院実習支援システム(ゼロックス社)についてお伺いします。

(7) 支援システムを使って何回くらい教員にメッセージを送りましたか？

a. 0回 b. 1～5回 c. 6～10回 d. 11回以上

B 薬剤師へのアンケート

学生へのかかわりについてお伺いします。

(1) 十分に学生をサポートできたと思いますか？

a. 十分にできた b. ある程度できた c. あまりできなかった d. 全くできなかった

三者ミーティングについてお伺いします。

(2) 三者ミーティングはその後の実習生を指導・評価するのに役立ちましたか？

a. 役立った b. ある程度役立った c. あまり役立たなかった d. 役立たなかった

病院実習支援システム(ゼロックス社)についてお伺いします。

(3) 支援システムを使って何回くらい大学の教員にメッセージを送りましたか？

a. 0回 b. 1～5回 c. 6～10回 d. 11回以上

C 大学の教員へのアンケート

学生へのかかわりについてお伺いします。

(1) 十分に学生をサポートできたと思いますか？

a. 十分にできた b. ある程度できた c. あまりできなかった d. 全くできなかった

三者ミーティングについてお伺いします。

(2) 三者ミーティングはその後の実習生を指導・評価するのに役立ちましたか？

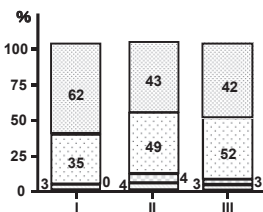
a. 役立った b. ある程度役立った c. あまり役立たなかった d. 役立たなかった

病院実習支援システム(ゼロックス社)についてお伺いします。

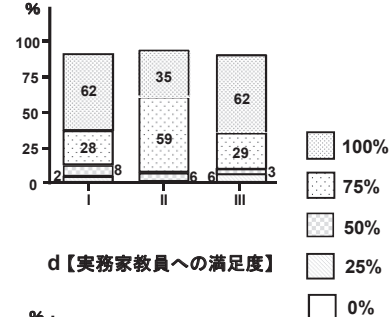
(3) 支援システムを使って何回くらい薬剤師にメッセージを送りましたか？

a. 0回 b. 1～5回 c. 6～10回 d. 11回以上

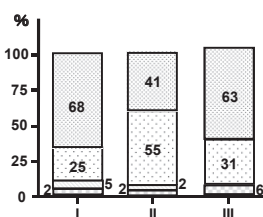
a【1回目の病棟薬剤師の満足度】



b【2回目の病棟薬剤師の満足度】



c【担当教員への満足度】



d【実務家教員への満足度】

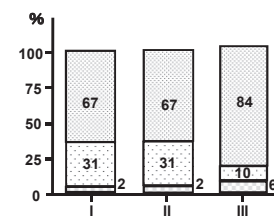
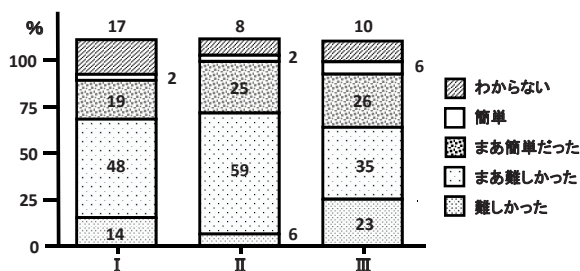


図2 指導に対する満足度

a 三者ミーティングの難易度は？(%)



b 三者ミーティングはその後の実習に役に立ったか？(%)

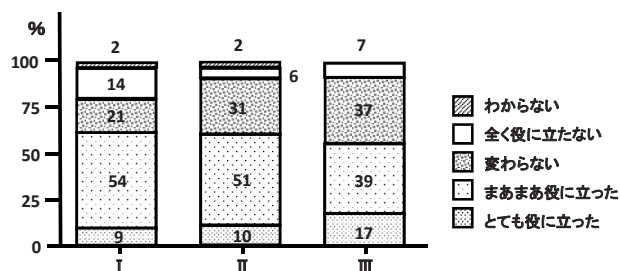
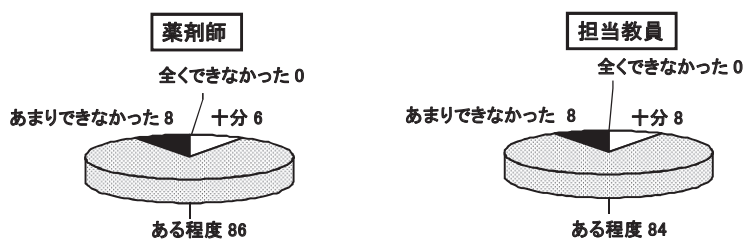


図3 指導に対する満足度

a 十分に学生をサポートできたと思いますか？(%)



b 三者ミーティングは、実習生を指導・評価するのに役に立ちましたか？(%)

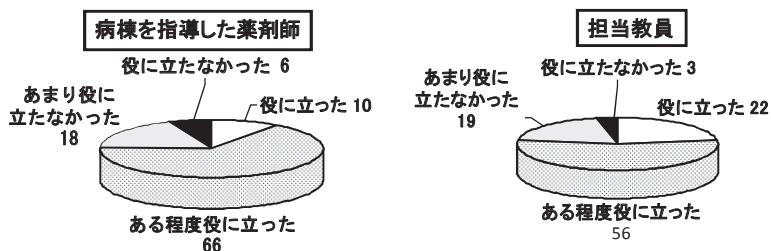


図4 薬剤師・担当教員へのアンケート結果

ケート調査をした結果である。三者ミーティングの難易度を「難しかった」および「まあ難しかった」とした実習生は、平均62%であった。一方、「まあ簡単だった」、「簡単」と回答したのは平均26%であった。三者ミーティングはその後の実習に役に立ったかについて、「とても役に立った」、「まあまあ役に立った」と回答した実習生は平均61%であった。しかし、平均37%の実習生は「変わらない」「全く役に立たない」と回答した。

3. 指導者からみた実習指導について

図4aは、全指導薬剤師および担当教員へのアンケート調査の結果である。「十分に実習生をサポートできたと思いますか？」の質問には、「十分」、「ある程度」サポートできたと答えた薬剤師と担当教員はともに92%だった。図4bは、病棟指導薬剤師および担当教員に「三者ミーティングは実習生を指導・評価するのに役に立ちましたか？」とアンケート調査をした結果である。「役

に立った」,「ある程度役に立った」を合わせると,病棟指導薬剤師は76%,担当教員は78%であった。

4. 実務実習支援システムの利用について

図5は,病院実習支援システム・メッセージ送信の使用頻度を回数別に示した結果である。図5aに示したように,平均54%の実習生が担当教員へメッセージを一度も送っていないかった。一方,指導薬剤師から担当教員へのメッセージ送信回数は,一度も送信していない率が最も多く,平均51%であった。しかし,担当教員から病棟指導薬剤師へのメッセージシステムの利用回数は,1~5回以下が最も多く,平均70%であった。

考 察

昭和大学薬学部では,参加型チーム医療実習を特長とした病棟実習を全ての5年生が昭和大学の附属病院で実施している。8週間を病棟実習にあて,担当患者の病態,治療方針,薬物治療などについて学び,将来の薬の専門家としての基盤形成を目指している⁴⁾。実習生は病棟での実習中,薬剤師から指導を受ける他に医師や看護師などの病棟スタッフからも指導を受けている。病棟スタッフからの指導は,6年制の薬学教育が目標とする

チーム医療の担い手として質の高い臨床能力を持つ薬剤師育成に必要である。その薬剤師育成の実現には,指導者同士が円滑に連携する体制作りも重要である。

本学薬学部は,指導薬剤師,担当教員,実務家教員が実習生をサポートする「実務実習サポートチーム」を構築し,各指導者の役割を明確に定義した(図1)。この役割について実習生,指導薬剤師,担当教員の3者からフィードバックを受けた。

アンケート調査は,実習生から指導に対する満足度や3者ミーティングの難易度などを聞いてサポートチームの指導をどう受け止めたかを確認するために実施した。また,実務実習支援システムの利用については,担当教員とのかかわりの頻度を確認するために実施した。

病棟1と病棟2での病棟指導薬剤師の指導は,75%以上満足とした実習生が9割以上いたことから,2回経験したどちらの病棟実習でも薬剤師の指導が適切であったと考えられる。向後⁵⁾らは,昭和大学の病院実習では,指導者が実務実習モデル・コアカリキュラムのSBOsの内容を良く理解した上で指導を行っていると報告しており,このことにより,病棟間に差が生まれず,実習生にとって指導に対する高い満足度が得られたと

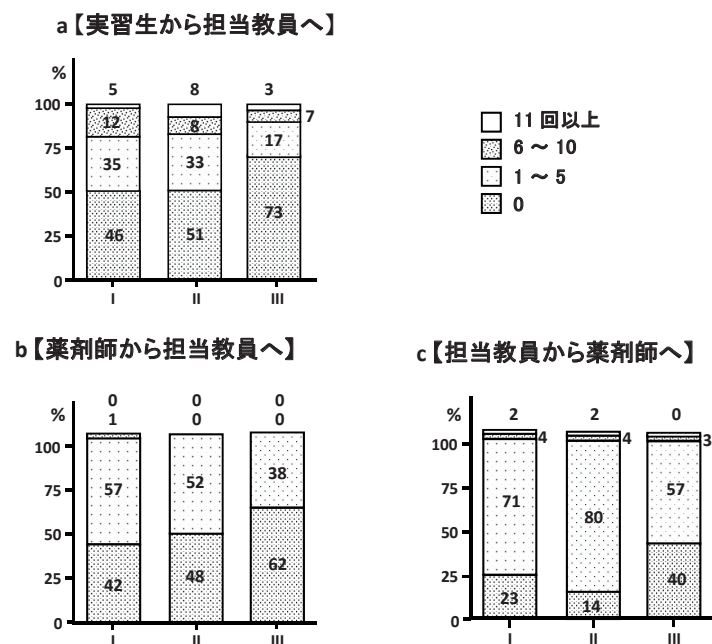


図5 病院実習支援システムを使用したメッセージ送信回数

推測された。さらに、実習生の自己評価点の到達率(4「よくできた」を100%とする)は83%であり⁵⁾、十分な学習効果が実感できたことも指導に対する満足度を高くした理由と考えられる。また、渡邊ら⁶⁾は、実習生の満足度が高い実習とは、実習内容に興味を持てた実習であり、具体的に、手術や検査の見学、病棟での回診やカンファレンスへの参加であったと報告している⁶⁾。本学の病棟実習でも、患者を担当することに加え、医局カンファレンスや手術見学、教授回診への参加、治療方針や治療薬に関するスタッフ間の意見交換の場に参加するなど、チーム医療の一員としてさまざまな経験をし、多様な薬剤師の業務を学べた内容も高い満足度が得られた理由と推測される。

実習生の担当教員に対する満足度は、Ⅰ期とⅢ期で100%満足と答えた実習生は、75%満足とした実習生と比較して2倍以上多かった。しかし、Ⅱ期のみ100%満足の実習生は、75%満足の実習生と比較して3割少なかった。この理由は、Ⅱ期の実習生は、Ⅰ期に薬局実習を終えており、薬局実習と病院実習の担当教員のサポートに違いがあったことが原因の一つと考えられた。サポートの違いの例として薬局実習には実習生から担当教員へ毎日送る実習日誌があった。日誌の内容から担当教員は、実習の様子が把握でき、問題抽出と解決を直接行った。一方、病院実習は実習日誌を書くことを課しておらず、実習における問題解決の窓口は主に実務家教員が行った。さらに、薬局実習のミーティングの時期は、全実習期間(11週間)中、等間隔に行った(1～2週目、4～7週目、10～11週目)。病院実習は、12週間のうち8週間に2回のみ行った。以上の違いなどから、実習生は、薬局実習と比較して担当教員との連絡を頻繁に取り合わなかった可能性がある。その結果、担当教員による指導の満足度に影響したのではないかと推測した。

実務家教員の指導に対して、100%あるいは75%満足と回答した実習生は、平均9割であった。これは、実習期間中、病院に常駐し、実習生の目標到達の進捗状況確認を絶えず行い、実習中の悩みなどのメンタル面でのサポートなどを行い、支

援したことが評価されたものと考えられる。九州福祉大学薬学部の永田ら⁷⁾も同様に実務家教員の指導に対する高い満足度を報告している。

3者ミーティングの難易度について、「難しかった」、「まあ難しかった」と回答した実習生は全体の約6割であった。この理由として、ミーティングの内容は、実習ガイドに記載した病棟実習チェックシートに従って行っている。このチェックシートは、SBOsに準じて作成しているため、ミーティングの内容は、実習生には少し難しいと感じるレベルと想定した。さらに、今回、初めて担当教員になった人は、薬学部教員全体の3分の1であった。ミーティングのレベルにバラツキがあるのでとは危惧したが、6割の実習生が難しいと感じた結果から、担当教員は、ミーティングのレベルを担保できたと推測される。一方、3者ミーティングを「まあ簡単」、「簡単」と答えた実習生も2割以上いた。今後は、病棟での実習内容の質の向上を目指し、ミーティングでの実習生の受け答えに対し評価をつけ、実習生へフィードバックすることにした。

3者ミーティングは、「その後の実習に役に立ったか」という問いには、「とても役に立った」と「まあまあ役に立った」という実習生は6割前後だった。この結果からも3者ミーティングの質を確保することは必要だと判断できた。改善策の一案として「実習日誌」を導入し、担当教員と指導薬剤師へ実習内容を毎日報告することで、ミーティングの効率を上げることを考えている。

実習生から担当教員への病院実習支援システムを使用したメッセージの送信回数は、Ⅲ期で一度も使用しない実習生の割合が増加した。この理由として、個人の携帯電話を用いたやりとりが多いことがわかった。その理由の一つに、病院実習支援システムには添付機能がないこと、ログイン操作が煩雑であること、携帯電話の機能と差別化ができなかったこと、転送機能にたびたび不具合が生じたこと、携帯電話からアクセスできないこと、などが考えられる。また、センター実習中は担当教員と連絡を取らない実習生が多かったため、12週間全体として病院実習支援システムを用いた

メッセージ送信は頻度が少なくなったと考えられる。

指導薬剤師と担当教員からは、サポートチームを編成した実習指導の有能性や指導者同士の連携の頻度を確認するためにアンケート調査を実施した。全薬剤師と担当教員の9割以上が十分、またはある程度、実習生をサポートできたと答えている。さらに、薬剤師の評価点の到達率が88%であったこととSBOsの実施率は100%であったこと⁵⁾が報告されており、サポートチームを構成した上で定義した各指導者の指導が適切だったと考えられる。病棟指導薬剤師と担当教員の7割以上が3者ミーティングは、実習生を指導・評価するのに役に立った、または、ある程度役に立ったと答えていることから、担当教員を交えた3者ミーティングも実習指導に有用であったと考えられる。しかし、病棟指導薬剤師と担当教員の2割が「役に立っていない」と答えていることから、実習生のアンケート結果からの推察と同様、3者ミーティングの指導内容の向上は必要といえるかもしれない。実習日誌は、実習の進捗状況や問題点を担当教員に把握できると期待できるので、ミーティングの効率をあげることが期待できる。

指導薬剤師から担当教員への支援システムを利用したメッセージの送信も、実習生と同様、利用頻度は少なかった。病院実習支援システムには個人の携帯端末への転送するシステムがあるが、その利用率が低かったことが原因であると考えられる。担当教員から薬剤師へのメッセージ送信の利用が多かったのは実習前であった。これは、実務家教員から薬剤師に対して挨拶メールをすることを依頼していたためである。入江ら⁸⁾は、実務実習の充実に向けて実習生の率直な意見を汲み上げる仕組みが重要であり、実習施設の他職種や患者、薬局利用者など、実習生を取り巻く多方面からのシームレスな連携と協力体制の整備並びにそれらをサポートするユビキタスな情報共有手段の構築が必要不可欠であると述べている。本学では、実習前から終了するまでサポートチームとして担当教員と実習を指導する薬剤師とが連携できる体制を整えた。この体制には実習支援システムが有効

である。よって、平成24年度から実習日誌を導入し、実習生が毎日このシステムを使って日誌を記入し、担当教員と実習を指導する薬剤師へ送ることとした。

以上、病棟での指導サポートチームによる実習指導に対するアンケート調査をした結果、指導薬剤師、担当教員によるサポートチームの実習指導は有用であったことが推測された。また、そこから3者ミーティングでの改善や実習中の指導者の情報の共有の推進などいくつか改善していくべき課題も見出した。

今後、サポートチームによるより円滑かつ実習指導に対する質の向上が望まれる。22年度は、病棟実習におけるサポートチームによる指導の強化を重視したため、センター実習中はミーティングを行わず、サポートチームが機能しなかった。この点を改善するために、実習生が日誌を通して担当教員とセンター実習の指導薬剤師に報告する。これは、ミーティングを行わなくても、実習期間中にわたり実習生のサポートが可能になると考えており、実習日誌の有用性などについては今後の検討課題である。

謝 辞

サポートチームによる実習指導、そしてアンケートにご協力下さいました昭和大学附属8病院の薬剤師の先生方と大学教員の先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Isao S, Mari K, Junichi M, et al: Development of Patient-Oriented Participatory Clinical Clerkship: Individual Patient Management and Innovatory Evaluation Scale. Jpn.J.Pharm.Health Care Sci., 35,743-750 (2009) .
- 2) 向後麻里, 齋藤勲, 小林文, 他: 昭和大学の実務実習への取り組み～患者担当制を導入した参加型臨床実習とその評価～, 月刊薬事, 53, 69-73 (2011)
- 3) 戸部敏, 倉田なおみ, 向後麻里, 弓削吏司,

齋藤勲：薬学実務実習必携，じほう(2012)

- 4) 齋藤勲，向後麻里，小林文，他：Active Adult Learning患者担当制病棟実習(Patient Oriented Clerkship)の学習者情動への影響，薬学雑誌，131-11，1595-1604 (2011.11)
- 5) 向後麻里，齋藤勲，小林文，他：長期実務実習への適切な表価方法の導入と実習生の到達度，昭和大学誌，2-2，139-147 (2011)
- 6) 渡邊美智留，三原潔，小清水治太，他：病院実務実習の問題点の解析と改善策の提案，日本病院薬剤師会雑誌，46，1279-1283 (2007)
- 7) 永田将司，岩切智美，熊谷有紀，他：実務実習教育における医療施設と大学との連携とその評価 医療施設への大学教員の派遣，日本病院薬剤師会雑誌，43，1095-1098 (2007)
- 8) 入江徹美：医療現場での実務実習の充実に向けて熊本地区の取り組み，医薬ジャーナル，47，1413-1418 (2011)

The effective clinical precepting by the Support Team for the Pharmacy Clerkship

—A questionnaires survey for the Pharmacy Clerkship—

Aya Kobayashi¹⁾, Mari Kogo¹⁾, Isao Saito^{1) 2)}, Jun-ichiro Murayama^{1) 2)}
Toshinori Yamamoto¹⁾, Yasuhisa Kato¹⁾, Yuji Kiuchi¹⁾

¹⁾ School of Pharmacy, Showa University

²⁾ Department of Pharmacy Service, Showa University Hospital

Abstract

【Background】 Here at the Showa University School of Pharmacy, we have been searching for a ideal formation of the Support Team (Pharmacists- Faculty members- Preceptors) and the contents of clinical precepting for trainees to conduct our clerkship system since 2007. We conducted a survey of the trainees, the pharmacists and the faculty members in order to know the effective clinical precepting by the team.

【Methods】 The training is for a total course length of 12 weeks. It is 8 weeks for ward training. In 2010, we formed a special support team in the course and conducted an extensive survey of the 166 trainees, the 112 pharmacists and the 65 faculty members. We also ask them about the message transmission system.

【Results】 We received surveys for response rates of 90 % (the trainees), 91 % (the pharmacists), and 94 % (the faculty members). 94 % of the trainees surveyed responded that they were satisfied with the course overall. Furthermore, 61% said that the Trainee-Faculty-Pharmacist Meeting had been a helpful resource for them throughout the course. In addition, 76% and 78% of the pharmacists and the faculty members responded that the meetings had been a useful tool in instructing the participants. On the other hand, 54% of the trainees surveyed responded that they had not used the message transmission system at all.

【Discussion】 Overall the level of satisfaction of the trainees surveyed was quite high. Additionally, for the pharmacists and the faculty members, more than 90 % of them responded that they felt they had sufficiently supported the trainees in the program. Therefore, it can be considered that the effective clinical precepting by the team was viewed very positively. However, that having been said, it is clear that we need to improve the message transmission system in order to increase the quality of the course.

Key words Pharmacy clerkship, Clinical precepting, Pharmacy education, questionnaires survey

Received 30 September 2011 ; accepted 20 June 2012

